２００９年１２月８日

福音とは何か

西九州伝道所牧師　佐々木正明

福音は、全世界の人々に等しく与えられた食べ物です。でもそれが、西欧人の口に合うように料理されてしまっていたら、日本人には、おいしくないかもしれません。

福音とは、信じる者には救いが無代価で与えられると伝える、素晴らしいニュースです。使徒パウロが全生涯を賭け、ルターが命を張った、プロテスタント神学の土台です。でも私たちが語る福音が、西欧流に料理されていては、日本人には向かないのです。

アブラハムは神を信じました。それを神は義と認めてくださいました。それが無代価の救いを伝える、福音理解の土台となった記述です。アブラハムは、子を与えると仰せられた神に信頼ました。その信頼を神は喜び、義としてくださったのです。そこには信頼以外の「働き」も「功績」もありません。悔い改めさえなかったのです。

福音派の神学では、悔い改めは義とされるための、絶対必要条件です。悔い改めは真摯な信仰の一つの要素に含まれ、行いではないと説明されるのです。でも本当の悔い改めには、聖い神の理解と罪の理解、自分が罪人だという理解とそれを受け入れることなどが、必要不可欠です。天地創造の神について何も知らない日本人にとって、それらは立派に「行い」です。しかも非常に困難な行いです。その日本人に、悔い改めを迫る伝道は、はたして福音でしょうか。アブラハムは、悔い改め無しに救われたのです。

たしかに、バプテスマのヨハネもキリストも、「悔い改めなさい」と呼びかけて宣教を始めました。福音書は、悔い改めを救いの前提としているようにも読み取れます。でも、この悔い改めへの呼びかけは、ユダヤ人に与えられたのです。天地創造の神の存在を、まったく疑うことなく信じていただけでなく、神の明確な自己啓示をくり返し受け、律法も与えられ、神に従うことを厳しく教えられていた人々です。罪をよく理解しながら、しばしば背信の罪を犯して、罪の自覚を強く持っていた人々です。悔い改めの呼びかけは、ユダヤ人にとっては明確な意味とインパクトを持っていただけでなく、神の国という待ちに待った福音も、一緒に提示されたのです。

その悔い改めの勧めを、神も罪も神の国も知らない日本人に語っても、ほとんど意味がないことは明らかです。そこで福音を語る者は、まず、何とかして悔い改めに意味を持たせようと努力します。罪について長々と語り、罪を理解させ、罪人であることを認めさせ、罪を告白させようと、罪、罪、罪、罪と、必死にくり返すことになってしまいます。いきおい、キリスト教は福音を語る代わりに、罪を取り立てて厳しく責める、あら捜しの宗教に落ちぶれてしまうのです。それが多くの日本人をかたくなにさせ、キリスト教に敵意さえ持たせてしまうのです。それなのに、たとえ罪を理解させたとしても、それは神を知らない者の罪であるために、単なる社会的犯罪や人間関係のいざこざの範疇に止まり、本物の罪に行き着かずに終わってしまうのです。

アブラハムは罪を悔い改めずに義とされました。シュメールという異教文化を背景に生まれ育った彼は、まだ神についても、罪についても、知識らしい知識を持っていなかったのです。彼が知っていたのは、体験を通して知っていた神です。幼子が体験を通して母親を知るのと同じ性質の知識です。彼が義とされたとき、必要だったのは、神についての頭脳的知識ではありませんでした。罪についての理解でも、悔い改めでもなく、素直に神に信頼することだけです。その信頼を神が受け入れ、義と認めてくださったのです。

現在の日本の宗教背景は、ユダヤの宗教背景とはまったく違います。長い間キリスト教を信奉してきた西欧諸国とも違います。天地創造の神を知らず、罪も知らないのです。そして、八百万と呼ばれる神々に囲まれています。それはむしろ、アブラハムが生まれ育ち、生活していた文化に良く似ているのです。

アブラハムに必要だったのは、他の神々すべてを偽りと宣言して、唯一絶対の神だけを

信じることではありませんでした。他の神々の存在と力を信じていても、義とされることには、問題がなかったのです。アブラハムは、ただ神を信じることによって、義とされたのです。それならば、私たち日本人も、八百万の神々の存在を否定したり、偶像をすべて処分したりすることなしに、義とされるはずです。罪を悔い改める必要もないはずです。

新約聖書でも、異邦人の伝道について記されている使徒の働きには、少しばかり異なった記述があります。パウロがアテネで多くの偶像崇拝者を前にして語った福音です。パウロはここで、偶像礼拝がはびこっている事実には立腹していますが、偶像崇拝者に対しては、非常な心使いで話しています。まず、アテネの人々が宗教に対して熱心であることを褒め、彼らが「知られない神」と呼んで礼拝している神が、パウロの信頼していた神であると言っているのです。パウロが宣べ伝えていた神は、パウロが外国から連れてきた神ではなく、昔からアテネにいてアテネの人々に信じられて来た神だと語りかけて、互いに共通の土台に立って話が出来るようにしているのです。彼はここで、罪については触れていません。罪について語らないまま、悔い改めを語っているのです。それはこの悔い改めという言葉が、ユダヤ的な意味の「悔い改め」と訳されるべきではなく、ギリシャ的に「心を変えて」「思い直して」と訳されるべき言葉だということで理解できます。パウロはギリシャ人に向かって語っていたからです。

日本人に必要なのは、昔から日本にいて、日本を愛し、日本人を慈しみ、四季を与え、緑を豊かにし、穀物を稔らせ、魚を増やしてくださっている神、日本人が、「なにごとのおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」と詠い、知らないまま信じ、感謝し、奉ってきた神が、聖書の教える天地をお造りになった神であることを知ることです。日本人は知らないで拝んでいたことを「思い直し」「心を変え」、その神に信頼するならば義とされるのです。義とされた上で、さらにこの方をはっきりと知り、この方の聖さと愛と恵みと慈しみと、キリストの十字架の贖いを知るならば、自分の罪を正しく理解して、本物の悔い改めにも至るのです。福音は行いなしに、信仰だけで義とされるという知らせです。

先日、５歳になる女の子が洗礼を受けたいと言い出しました。彼女はまだ、神様についてほとんど理解していません。でも「いまイエス様はどこで何をしておられるの？」という私の問いに、「私の近くにいて、私の心にもいて、私の祈りを聞いて、いつでも助けて下さるの・・・」と答えてくれました。私たちが救われるのは、イエス様が私たちの罪のために十字架で死んでくださった事実を理解し、信じるからではなく、かつて死に、いま生きておられ、私たちを愛しておられるイエス様を信頼するからです。それが福音です。